



尿閉に用いる薬剤について

入院患者が膀胱を完全に空にできず残尿感・頻尿を訴えたり、まったく排尿ができなくなったりすることがあります。これは尿閉と呼ばれる問題で次の原因で起こります。

手術後の痛み 尿閉を引き起こす薬剤の服用 長期間のベッドでの安静
尿閉は50歳以上の男性によく見られます。

これは排尿の妨げとなる前立腺の肥大が年齢とともに多くなるからです。

MSDマニュアル家庭版 入院による排尿困難 より改変して引用

尿閉が起こった場合には専門医による診察を経て薬剤が処方され、経過を見ていくことがしばしばあります。当院入院中に尿閉が起こった場合によく用いられる薬剤について作用機序や副作用など薬剤師目線で他の医療スタッフにも押さえて欲しいポイント(特に副作用モニタリング)をまとめるので参考として下さい。

○ タムスロシン、シロドシン



作用機序：前立腺や尿道に存在する α_1_A もしくは α_1_D 受容体を選択的に遮断することで尿道を拡げ、排尿を助ける

副作用：起立性低血圧(それに伴うふらつき、めまい等)、射精障害など

※血管に存在する α_1_B 受容体も遮断してしまうことがあるため血圧の低下が起こる
入院時にもともと降圧剤を何剤も使用している方に追加で処方された場合には
特に注意が必要(リハビリなど離床時にふらつきはないか)、男性のみ使用可

○ エブランチル



作用機序：非選択的に α_1 受容体を遮断することで尿道を拡げ、排尿を助ける

副作用：起立性低血圧(それに伴う頭痛、めまい、立ち眩み等)、肝酵素上昇など

※血管に存在する α_1 受容体も遮断するため高血圧の治療でも用いられる

したがって、タムスロシンなどと同様に低血圧の副作用に注意が必要
(こちらもリハビリなど離床時にふらつきはないか)、男性でも女性でも使用可能

○ ウブレチド



作用機序：アセチルコリン(ACh)分解酵素の働きを阻害してAChを増やす

→ AChは副交感神経に作用して排尿を促すため、排尿が促進される

副作用：恶心、嘔吐、腹痛、下痢、徐脈、縮瞳、流涎、呼吸困難など

※上記の副作用はコリン作動性クリーゼというAChが過剰になることで起こる重篤な副作用の初期症状である可能性があります。開始後に同様の症状を認めた場合は中止を考慮する必要あり。投与開始後2週間以内に発現する割合が高いとされ、この期間は特に厳重な観察が必要、男性でも女性でも使用可能

※「各種添付文書」「ウブレチド錠ご使用時の注意事項」を参考に作成

一部イラストは ソコスト(<https://soco-st.com/>)、製品画像は各メーカーHPからお借りしました